

きつねとぶどう

山の中のきつねのすで、きつねの子がなくなっていました。

「こーんこん、おなかがすいた。」

すると、おやぎつねがいました。

「待^まっておいで、今おかあさんがおいしいものをとってきてあげる。」

こぎつねはなくのをやめて、おとなしく待っていました。一時間待ちました。おやぎつねは帰ってきません。二時間待ちました。まだ帰りません。三時間待ちました。それでも帰ってきませんでした。こぎつねはとうとうなきだしました。

「またおなかがすいてきたあ。」

おやぎつねはどうしたのでしょうか。じつはその時、村へ行つてぶどうを一ふさとつてこようと一生けんめいかけていました。

一つ山をこしました。二つ山をこしました。三つの山をこした時、やっとぶどうの村へつきました。

「おなかがすいて子どもがいないのです。すみませんが、ぶどうを一ふさいただきます。」

おやぎつねはそういつて、ぶどうの木にとびあがり、大きなふさを取りました。それをくわえて、大いそぎで山の方へもどりました。一つ山をこえ、二つ山をこえ、また三つの山をこしました。きつねのすは、もうすぐ近くになりました。るすのうちにおそろしいわしなどに、あの子はさらわれはしなかったろうか。でも、あれ、こーん^{*}こんなきこえがしております。おやぎつねは安心しました。と、にわかにつかれがでてきました。持ったぶどうが、重くて重くてたまらなくなったのです。で、一本の木の下にそのぶどうの一ふさをおいて、やれくたびれたとやすみました。

ところがその時、やすむまもなく、すぐそばでわんわん犬のこえがしました。りょうしが犬をつれてもうそこにきているのです。

どうしましょう。ぶどうどころではありません。

こぎつねがてつぼうでうたれます。思わずおやぎつねは、大きなこえで呼びました。

「こーんあぶない。はやくにげなさい。」

こぎつねはこのこえにびっくりして、あなをとび出し、かけてかけて

山のおくへにげて行きました。

それから何年たつたでしょうか。長い月日がたちました。しかしおやぎつねはとうとう

にわかに^{きつね}急に。とつぜんに。

帰ってきませんでした。おかあさんをさがして、山の中を歩いているうち、こぎつねは大きくくなりました。

ある時、昔^{むかし}おかあさんとすんでいたすの近くにやってきました。すると一本の木の下にぶどうがはえていました。そのつるが木にまきのぼり、たくさんのみごとなふさをさがらせていました。

「こんなところにぶどうがあつたかしら。」

こぎつねはふしぎに思いながら、そのひとつぶをたべました。何とおいしいぶどうでしょう。

「ああ、おいしい。ああ、おいしい。」

こぎつねはのどをならして、次から次へとたべました。

しかしその時、ふとおかあさんのこえを思い出しました。

「まっとおいで、おいしいものをとってきてあげる。」

すると、そこにぶどうのなっているわけがわかりました。

「そうだ。」

そう思うと、今はどこにいるかわからないおかあさんに、こえをあげて、おれいをいいました。

「おかあさん、ありがとうございます。」

